

■第3章 概説■

常総型（じょうそうがた）石枕を特徴づける要素の1つが、石枕に付属する立花です。

しかし、西日本ではひきつづき枕がみられ、枕そのものが消滅したわけではありません。

近畿地方では、大阪府南塚（みなみづか）古墳や三重県井田川茶臼山（いでがわちゃうすやま）古墳などで、石棺底にはめこむ石枕が出土しています。

また、古墳時代前期から一定数の造り付け枕や独立した枕が分布する九州では、装飾古墳として名高い、福岡県桂川王塚（けいせんおうづか）古墳を代表に、遺体を安置する屍床石（ししょういし）に枕を彫りこむ事例が確認されています。

このように、死者のための枕は古墳時代後期も存続していました。

しかし、古墳の衰退と火葬の導入により、次第に姿を消していきました。

死者の枕が終焉を迎える、古墳時代終末期における枕の代表例が、大阪府阿武山（あぶやま）古墳の玉枕と、奈良県竜田御坊山（たつたごぼうやま）3号墳の琥珀（こはく）製枕です。

どちらも高位の貴族以上の古墳とみられ、枕は、それまでの枕とは材料や製作技術がまったく異なる特注品です。